

## 〈論文〉

## 植民地時代末期テハスにおける独立運動

—グティエレスの反乱を中心に (1812~1813年) —\*

二 瓶 マリ子

## はじめに

メキシコ—米国間のヒトの移動がますます激化する今日、両国にまたがる境界地域の歴史的形成過程を明らかにすることへの関心が高まっている(古矢 2002: 91)。この境界地域のなかでもテハスは、18~19世紀半ばにかけて、その領有をめぐる対立が絶えなかった地域である。副王領期テハスにおいて、境界をめぐりスペインと諸外国との関係が緊迫した時期は二度存在する。一度目はフランス侵略の危機に直面した18世紀初期(Cruz 1988: 52-54)、二度目は米国侵略の可能性が出てきた、ルイジアナ買収(1803年)以降メキシコ独立運動期にかけてである。本稿は後者の植民地期末期テハスに焦点を絞り、そこで起きたメキシコ独立運動と、これに付随して発生したメキシコ—米国間境界対立の展開過程を明らかにする。

宗主国とヌエバ・エスパーニャとの関係に焦点をあてたメキシコ独立運動研究は、数多く存在する(Anna 1978; 1987; Brading 1970; Guedea 2000; Hamnett 1986; 1997; Ladd 1976; Rodriguez O. 1975; 1998; 2000; Van Young 2001; Vázquez 2008; Villoro 1967)<sup>1)</sup>。これらの研究は、天然資源に恵まれた副王領中央部での運動に焦点をあてるいっぽう、辺境地テハスでの運動を射程に入れることは少ない。植民地期テハスは、スペイン本国の歳入源となる天然資源が見つからず、入植も進まなかつ

た<sup>2)</sup>。そのため多くの先行研究者は、メキシコ国家形成過程のスタート地点として理解されうる独立運動に、テハスが果たした役割は少なかったとみなすようだ。しかし、テハスは当時、「野蛮なインディオ (indios bárbaros)」や諸外国勢力（主に米国とフランス）が内陸部に侵略するのを防ぐ緩衝地帯として、軍事的役割を担っていた。この点に着目すると、テハスの重要性が浮き彫りになろう。ヌエバ・エスパーニャにおけるスペイン支配体制がいよいよ弱体化し、独立運動が始動すると、この境界地域では、ホセ・ベルナルド・マキシミリアーノ・グティエレス・デ・ララ (José Bernardo Maximiliano Gutiérrez de Lara) が米国人義勇兵と「野蛮なインディオ」を味方につけて、独立運動を起こした (1812~13年)。このさい、メキシコが近い将来テハスを喪失することを予期するような事態が発生したのである。

グティエレスの運動を論じた先行研究は、おおきくふたつに分けられる。第一は、地方史家によるもので、ヌエバ・エスパーニャと米国両方の史料に基づき、米国政府はグティエレスの反乱を支援することで、テハス併合を目論んでいた、という前提に立つものである (Almaráz 1971 ; Castañeda 1976 ; Faulk 1964 ; Garrett 1939 ; Hatcher 1927 ; Henderson 1951 ; Jarratt 1949 ; Narrett 2002 ; Owsley Jr. and Smith 1997 ; Poyo 1996 ; Vigness 1965 ; Warren 1943)。これらの研究の多くは、米国人研究者によるものであるためか、米国人が中心となって反乱軍を統率した、と主張している<sup>3)</sup>。グティエレスを米国政府の傀儡とみなし、非主体的に描く傾向があるのである。しかしグティエレスは、メキシコの独立を目指す主体的な人物であった。本稿ではまず、この点を明らかにしたい。

第二の先行研究は、スタッグによる外交史で、米国政府の公文書のみを依拠し、米国政府や政府関係者がグティエレスの反乱を公式に支援した証拠は無い、とするものである<sup>4)</sup>。彼によると、当時英国と対戦していた米国政府にとっては両フロリダの獲得が優先課題であったため、テハスでの反乱を支援し、その領土を併合しようとする意図や余裕は無かったという

(Stagg 2002 : 479-480)。しかしこの時期、米国政府は、スペイン領植民地の独立運動を好意的に捉え、各地の反乱軍リーダーと接触を持っていた (Manning 1925 vol. I : 11 ; West 1929 vol. 1 : 71)<sup>5)</sup>。また、ヌエバ・エスパーニャおよび米国の公文書からわかるように、米国政府は、グティエレスの反乱に加わろうとする米国人義勇兵の行動に干渉しなかった<sup>6)</sup>。さらに、このような米国政府の態度を受けて、駐米スペイン大使ルイス・デオニス (Luis de Onís) をはじめとする官僚は、米国が反乱軍を助けてテハスを混乱に陥れ、リオ・グランデ (Rio Grande) までの領土を併合しようとしている、と認識していた (Manning 1925 vol. III : 1895-1904 ; Hernández y Dávalos 1877-1882 vol. IV : 145-156)<sup>7)</sup>。これらの点を踏まえると、米国の史料のみに依拠するスタッグの論には疑問が残る。反乱軍の約半分を米国人義勇兵が占めたグティエレスの反乱を考える場合、外交関係ではなく、グティエレスの周囲の米国人が実際にどのような行動をとったのが重要なのである。本稿はこの点に配慮し、グティエレスの反乱の展開過程を明らかにする。また本稿では、先行研究で論じられることの少ない「野蛮なインディオ」と反乱との関わりについても、数少ない史料に基づき可能な限り配慮したい。

## I 19世紀初期テハスの状況<sup>8)</sup>

はじめに述べたように、植民地期、ヌエバ・エスパーニャ最北東部に位置したテハスは、緩衝地帯としての役割を担っていた。フランス侵略の可能性が高まった18世紀初期、スペイン政府は、辺境地テハス地方への入植政策を本格的に開始した。移民の多くはカナリア諸島出身者 (Isreños) とトラスカラ人であったが、特にカナリア諸島出身者は、何世代にもわたって参事会 (cabildo) の役人を務めており、地域行政における中心的役割を果たしていた (de la Teja 1995 : Chapter 7)。一方、テハス地方全体の行政を司ったのは、サン・フェルナンド・デ・ベハル (San Fernando de Béxar、当時のテハスの都) 在住のペニンスラールの総督 (gov-

ernador)であった。当然ながら、クリオーヨである参事会の役人と総督との間には、明確な差が存在した。前者は、地域の住民と連帯し、地域に根差した行政をすることが求められる一方で、後者は、地域の住民と一定の距離を保ち、常にスペイン国王や副王に忠実であることが求められたのである (Cruz 1988 : 131-132)。

18～19世紀にかけて、テハスには村 (villa) がいくつか点在するだけであり、これら以外の領土は「野蛮なインディオ」が支配する荒野であった。1809年の時点における主要な村の人口は、サン・フェルナンド・デ・ベハル1700人、ナコグドーチェス (Nacogdoches) 655人、ラ・バイア (La Bahía) 405人であり、合計3122人であった (Benson 1968 : 611)。

テハスには当時、野生の牛や馬が多く生息しており、大半のテハーノ (tejanos、テハス住民の意) は牧畜業を営んでいた。いっぽう、金や銀といったスペイン本国の資金源となる天然資源はなく、農業もままならなかった。他の地域の住民と比べると、テハーノは極めて貧しく、スペインから副王領内陸部を通過して持ち込まれるさまざまな生活必需品を入手することができなかった (Reséndez 2004 : 96)。そのため彼らは、ルイジアナの外国人商人や「野蛮なインディオ」と非合法取引をすることで、生活必需品を手に入れていた。ルイジアナ買収以降、スペイン人役人は米国人が侵略してくることを警戒し始めたため、テハーノの間で行われている非合法取引の取り締まりを強化していった。しかし、役人ら自身は非合法取引をやめなかったため、テハーノの間ではスペイン人役人に対する反感が強まっていったようだ (Poyo 1995 : 19, 22)。

テハスは、軍事・防衛の面でも大きな困難を抱えていた。「野蛮なインディオ」や諸外国勢力からテハスを防衛するための十分な資金は常に不足し、サン・フェルナンド・デ・ベハル部隊は何年にもわたって旧式の武器を使いまわす状態であった。また、兵役についても報酬は極めて少ないため、脱走する者が後を絶たなかった (Moorhead 1975 : 161)。このような状態であるから、見返りが少ないのにも関わらずテハスの防衛を主張する

スペイン人役人に対し、不信感を抱く兵隊も少なくなかった。のちに出てくるグティエレスの片腕メンチャカ (Menchaca) も、このような兵隊の一人であった。

ルイジアナ買収以降、米国政府がテハスに強い関心を抱いているのは明らかであった。ジェファソン大統領は、ルイス＝クラーク探検隊 (1804-1806) やレッドリバー探検隊 (1806) を支援し、西部の探索を進めた。同時に、牛や馬を求めてテハスに不法侵入する米国人商人の数も年々増加した。これを危険視した東内陸諸地方 (Provincias Internas de Oriente) 総司令官 (Comandante General) は、テハス＝ルイジアナ境界に位置するリオ・サビーナス (Rio Sabinas) に警備隊を派遣した。すると米国政府も警戒して軍を派遣し、1806年秋、両者は軍事衝突する寸前になった。しかし、両軍の間では、リオ・サビーナスとアロヨ・オンド (Arroyo Hondo) に囲まれた地域をスペイン・米国両政府が不干渉の地域ニュートラル・グラウンド (Neutral Ground) にする、という協定が結ばれたため、和解が成立した (Almaráz 1871: 18)。その後、ニュートラル・グラウンドは、副王領や米国から脱走兵や逃亡奴隷、犯罪者などが集まる無法地帯となった。彼らは、テハス＝ルイジアナ間を行き来する商人を襲ったりして生計を立てていた (Garrett 1945: 549; Haggard 1945: 1001-1128)。

## II 独立運動準備過程

米国は、ヌエバ・エスパーニャで独立運動が始まって以降も、テハスに対する関心を抱き続けた (Hamilton 1969 vol. V: 123-124)<sup>9)</sup>。その一方で、ミゲル・イダルゴ・イ・コステイーヤ (Miguel Hidalgo y Costilla) をはじめとするヌエバ・エスパーニャの反乱軍リーダーも、テハスを重要な活動拠点とみなしていた。彼らは十分な資金や武器を持たないため、テハスにおいて米国からの援助を取り付けて軍を立て直し、内陸部に再度進撃しようと考えていたのである (Alessio Robles 1978: 639; Manning

1925 vol. III : 1594 ; Zorrilla 1995 vol. 1 : 36)。

この頃、東内陸諸地方 (Provincias Internas de Oriente) 全体に独立運動を普及させる活動をおこなっていたのが、グティエレスである。彼の祖父は、1750年代、レビーヤ (Revilla, Nuevo Santander) への入植政策が始まったとき、そこに入植してきたクリオーヨである。父の代からは、リオ・グランデ付近に7000エーカーの土地を所有することになり、教会法や市民法をモンテレイで学んだ長男は、レビーヤの聖職者となった。一方、次男のグティエレスは一家の土地を継ぎ、鍛冶屋および商業を営む大地主となった (de la Garza 1939 : 6 ; Milligan 2010 : 19)。反乱軍が内陸部から北上してくると、グティエレスはイダルゴに接触し、ワシントンで米国政府の援助を取り付けて来る任務を引き受けた<sup>10)</sup>。その後イダルゴ軍は王党軍に捕まってしまうが、グティエレスは無事ワシントンに向かう準備を整え、仲間とキャラバンを組み、1811年8月、レビーヤを出発した (Gutiérrez de Lara 1921 : 6 ; Milligan 2010 : 26 ; Warren 1943 : 4)。

テハスを通過してルイジアナに向かう途中、一行は王党軍に捕まらないために、「野蛮なインディオ」が支配する領土を通過してルイジアナに向かった。タワカノ族 (Tahuacanos) の居住区を通過したさい、グティエレスの片腕でサン・フェルナンド・デ・ベハル部隊の脱走兵メンチャカは、次のように言ったという。「これからイギリス系アメリカ人 (Americanos Yngleses) を連れてきて、ここの都を襲うつもりだ。(中略) もし反乱に加わるならば、銃や火薬を支給する<sup>11)</sup>」。これを聞いたタワカノ族は、コマンチェ族 (Comanches) およびタワヤセ族 (Tahuayases) と会談した。そして、コマンチェ族長オソバヨ (Osobayo) がリーダーとなり、サン・フェルナンド・デ・ベハルを襲撃する計画が立てられた。

その間、グティエレスらは、ニュートラル・グラウンドを通り、ナキトッシュ (Natchitoches) に到着した。ここでグティエレスは、米国政府が派遣した連邦政府先住民政策担当官 (Indian Agent) ジョン・シブリー (John Sibley) と面会し、陸軍長官ウィリアム・ユースティス (William

Eustis) への紹介状をもらった (Smith 1991 : 183)。その後、グティエレスがワシントンに向かうあいだ、メンチャカはニュートラル・グラウンドで米国人義勇兵を味方につけて、サン・フェルナンド・デ・ベハルに進撃することとなった。グティエレスはこう述べている。「サン・フェルナンド・デ・ベハルの部隊は、メンチャカに加わることを待ち望んでいる。なぜなら彼は、兵士全員を訓練した経験を持つ熟練の兵士であり、ほとんどの者から尊敬されているからである (Gutiérrez de Lara 1921 : 8)」。こうしてメンチャカは、ニュートラル・グラウンドからテハスに侵略しようとするのだが、その途中で王党軍に捉えられ、この計画は頓挫した。一方グティエレスは、ニューオリンズでルイジアナ州知事ウィリアム・クレイボーン (William Claiborne) と面会したあと、ナッチェス道 (Natches Trace) を通り、1811年12月11日、ワシントンに到着した。(Castañeda 1976, vol. VI : 2 ; Jarratt 1949 : 1 ; Martinez 1967 : 7 ; West 1928 vol. I : pp. 58, 69)。

翌日からグティエレスは、米国政府からの援助を求めてユースティスと会談した。グティエレスの独立運動回顧録によると、この交渉で彼は2つの問題に直面したようである。第一の問題は、スペインと米国が中立条約を締結している点であった。このため米国政府は、公式にグティエレスを援助することはできない、と伝えたのである。しかしグティエレスは、以下の理由をもとに、米国からの援助の必要性を訴えた。

- ① メキシコの独立を支援すれば、将来、メキシコとの貿易を通じて米国の経済は発展する。
- ② 同じ土を踏む仲間であるため、メキシコの問題を米国の問題として捉えるべきだ。
- ③ もし、ヨーロッパのいずれかの国がメキシコを支配することになった場合、米国にも悪影響が及ぶ。

これらの主張を受けて、米国政府は支援を引き受け、10万丁の銃を近い将来テハス近くの港に届けることになったという (Gutiérrez de Lara

1921:10)。ただし、筆者の手元にある史料を検討する限り、米国政府がこの計画を予定通り実行したかどうかは、不明である。グティエレスが1811年当時つけていた日記に基づくと、数日間に及ぶ交渉の末、米国政府から公式な支援を取り付けることはできなかったと記されている (West 1928 vol. 1 : 72-73)。そのため最終的にこの計画は、実行されなかった可能性もある。

第二の問題は、テハス—ルイジアナ間の境界についてであった。グティエレスは、こう記している。「米国政府は、私にもう一つ大変困難な問題を突きつけてきた。彼らは、私が到着する以前に、ルイジアナ境界地域を占有するつもりだったというのである。米国政府は、フランスが先にマタゴルダ (Matagorda) 港を発見したことを記す史料を見つけた。したがってルイジアナの境界は、リオ・グランデまで拡張されなければならないし、米国政府はそこまでの領土を占有する権利があるのだという」。グティエレスがこの要求を拒絶すると、米国政府は新たな計画を申し出た。それは、ケンタッキーとテネシーで集めた1万5千人の義勇兵を、テハス—ルイジアナ境界ではなくリオ・グランデまで派遣し、そこから内陸部の反乱軍を助ける、という計画であった。これに対しグティエレスは、彼が最高指揮官となり、彼の司令に絶対服従するのであれば、その計画を引き受ける、と答えた。すると米国政府は「沈黙し、この件に関してさらに言及してくることは無かった (Gutiérrez de Lara 1921 : 11)」。グティエレスは、米国政府からの援助を受けることには積極的であったものの、その見返りとしてテハスを米国に譲ることは、全く考えていなかったようだ。

米国政府との交渉を終えた後、グティエレスはしばらくワシントンに滞在し、ナポレオンのスパイヤ、米国からの援助を求めておなじくワシントンを訪れていたスペイン領アメリカのリーダーたちと交流した。なかでも特に彼が親睦を深めたのは、キューバ生まれのホセ・アルバレス・デ・トレド (José Álvarez de Toledo) であった<sup>12)</sup>。トレドは1810年、サント・ドミンゴの代表としてカディスに赴いたさい、スペイン領アメリカ全体の



独立を主張したため、1811年以降、フィラデルフィアで亡命生活を送っていた。彼はフィラデルフィアで発行された新聞で、次のように主張している。「私は、コロロンが発見した大陸および島々、全ての完全なる独立と自由を切望している。私は<sup>american</sup>人である。幸福と栄光に満ちた再<sup>regeneración</sup>生に貢献することができるのならば、喜んで血を流そうではないか」。トレドの信念に感銘を受けたグティエレスは、彼と協力して副王領の独立を達成しようと考えた。一方トレドは当時、モンローからの協力を得ることができたため、キューバで独立運動を起こす予定であった。しかし、理由は定かではないがキューバでの計画は中断し、トレドはグティエレスの反乱に協力することを決意した (West 1928 vol. I : 75 ; Warren 1940 : 56-58, 64 ; Benson 1960 : 14-15)。

二人は独立運動の計画を練るため、ワシントンを後にし、フィラデルフィアに向かった。当時そこには、独立を望むスペイン領植民地各地のリーダーが集まっていたが、とくに、スペインとの通商に興味を持っていたアイラ・アレン (Ira Allen) の自宅は、独立を目指すクリオーヨの亡命者を受け入れていたため、彼らが頻繁に会談する場所となっていた。グティエレスとトレドも、アレンの家で、メキシコの独立に向けた計画を練った。その結果、グティエレスはルイジアナで義勇兵を募りテハスに進撃するあいだ、トレドはフィラデルフィアでそれを後押しすることが決まった。こうして1812年2月、グティエレスは船に乗り、ルイジアナに向けて出発した (West 1929 vol. II : 283-285 ; Milligan 2010 : 40)。

### III グティエレス・マギー遠征隊結成

グティエレスがルイジアナに向かうあいだ、ニューオリンズのスペイン人領事ディエゴ・モルフイ (Diego Morphy) は、テハス総督マヌエル・デ・サルセード (Manuel de Salcedo) に対し、「米国が派遣したある人物が、反乱軍が必要とする武器や弾薬を集めて、ナキトッシュュに向かう準備をしている」、と報告している<sup>13)</sup>。この連絡をうけてサルセード総督は、

ナコグドーチェスの外国人不法滞在者や、ニュートラル・グラウンドに住む盗賊の取り締まり、テハスルイジアナ間の人や郵便物の移動の禁止といった対策を試みた。しかし他の地域でも反乱が続いていたため、テハス王党軍は、兵士や馬、武器、食糧、資金を十分に有しておらず、それらの対策を徹底して行うことはできなかった<sup>14)</sup>。

加えてこの時期、テハス王党軍は、「野蛮なインディオ」からの襲撃にも頭を抱えていた。18世紀後期以降、テハス総督は、友好関係を維持するため、彼らに対して馬や銃、弾薬といった物品を供与していたが、1810年以降財政が逼迫すると、その政策を継続することは不可能になった (Hämäläinen 2008 : 141-180)。こうして物品を得ることができない「野蛮なインディオ」は、スペイン政府に対する反感を強め、テハーノを襲撃した<sup>15)</sup>。また、米国の存在も、「野蛮なインディオ」の反スペイン感情を助長することとなった。1803年以降、領土拡大を望む米国政府は、テハスルイジアナ境界地域に住むインディオと友好関係を結ぶことを重視し始め、1805年には、ナキトッシュに連邦政府先住民政策担当官シブリーを派遣した。彼の目的は、ナキトッシューナコグドーチェス一帯で一番有力なカド族 (Caddos) との友好関係を築き、彼らとスペイン政府との関わりを絶つことであった。この目的を達成するために、シブリーは、スペイン政府の贈り物に、質・量ともに勝る物品 (銃や食器、火薬、資金) を供与したり、それらを毛皮と交換したりした。すると、米国人と交易するほうがスペイン人とのそれよりも有益であったため、カド族や、彼らと友好関係を持つ他の「野蛮なインディオ」は、次第に、米国政府との友好関係を重視するようになった (Sibley 1922 : 54, 55, 67 ; Smith 1991 : 177-204)。この状況のなか独立運動が発生したので、「野蛮なインディオ」が反乱軍と米国人義勇兵とともに、サン・フェルナンド・デ・ベハルを襲撃するのではないか、という王党派の不安は募るばかりであった<sup>16)</sup>。

この懸念は、1812年4月、ウィリアム・シェラー (William Shaler) とグティエレスがナキトッシュに到着すると、次第に現実のものとなって

いった。シェラーは1802年、リチャード・クリーブランド (Richard Cleveland) とともに、スペイン領植民地と貿易するために、アメリカ大陸の太平洋沿岸を航海した。チリのバルパライソに寄港したさいには、スペインに不満を抱くクリオーヨと出会い、植民地の独立が繁栄をもたらすことを主張し、スペイン語に翻訳された米国独立宣言を配布したと言われている (Whitaker 1964 : 14)。それから10年後、スペイン領アメリカに関する知識を持ったシェラーは、連邦政府特別代理人 (Special Agent) として米国政府からルイジアナに派遣された。彼の目的は、ヌエバ・エスパニーヤとの善隣友好関係を築くとともに、独立運動の進捗状況をワシントンに知らせることであった<sup>17)</sup>。はじめに述べた通り、彼がグティエレスの反乱を支援したか否かをめぐっては、スタッグと彼以外の先行研究者の間で意見が分かれる。米国政府の外交史料を検討する限り、スタッグの言うとおりに、シェラーが公式にグティエレスを支援したと断言することはできないが、反乱に関わっていたことは明らかである。なぜならば、シェラーは、グティエレスがニューオリンズからナキトツシュに向かうさい、彼に同行してその旅費を負担したり、別の機会には、米国人義勇兵に対する声明文をグティエレスが執筆するのを手伝ったりしているからである<sup>18)</sup>。また、グティエレスやトレドは、シェラーを「大佐」と呼び、反乱軍の状況を知らせている<sup>19)</sup>。さらにはシェラーが、グティエレスの助言者として活動していたことを示唆する史料が残っている<sup>20)</sup>。

グティエレスと一緒に遠征隊を率いたのは、ウィリアム・マギー (William Magee) であった。米国陸軍将校であったマギーは、テハスの併合を望んでいたため、陸軍を辞めてグティエレスに加わり、北部共和軍 (Republican Army of the North) を結成した。そして彼らは、1812年4月から7月にかけて、武器や火薬、兵隊を集めて遠征の準備をすすめた。グティエレスがテハーノや王党軍脱走兵、「野蛮なインディオ」の義勇兵を募るあいだ、マギーは、ニュートラル・グラウンドに住む無法者や、ミシシッピ、ケンタッキーなどから来た米国人を集めた (Chipman 1999 :

39)<sup>21)</sup>。

遠征隊の人数は時期にもよるが、米国人約300~500人、テハーノ約500人、「野蛮なインディオ」約300人とされている<sup>22)</sup>。当時のテハス全体の人口は3000人程度であったから、遠征軍の規模は大きかったことが分かる。義勇兵への報酬は1ヶ月40ドルで、独立が達成されればテハスの土地1レグワが与えられることが約束された (Vigness 1965: 10; Haggard 1945: 38-39)。米国人を対象とした北部共和軍遠征隊入隊規定には、以下のように記されている。

私たちは、スペイン領に住む共和主義者の同胞を助けるために団結しなければならない。彼らは、サビーン川の西 (米国領土の外) に集まり、そこで戦闘の準備をし、反乱に加わるように、これまで幾度となく要請してきている。彼らは、各地域の勇敢で気高い住民を、独裁と圧政の鎖でがんじがらめにしている独裁者たちに抵抗して、権利と自由を獲得するために闘っているのである。

私たちは、その要請に従い、彼らを隷属の状態から解放すべく救いの手を差し伸べ、独裁を絶ち切り、共和制システムを確立することを望んでいる。それゆえ私たちは、サビーン川の西側に自発的に集まり、上記した目的のために戦うことに同意する (括弧内原文)<sup>23)</sup>。

ここでは当時、公式に反乱軍を支援することができない米国政府の状況をうけてか、ニュートラル・グラウンドに自主的に集まるように述べられている。また、この規定をみる限り、米国人義勇兵の目的は、ヌエバ・エスパーニャの独立と、共和制システム導入の手助けをすることであった。しかし後ほど本稿で明らかになるように、実際には、米国人義勇兵がテハス併合の可能性を視野に入れていたことは、否定できない。

ナキトッシュで遠征隊の準備が進む間、テハス王党派は「野蛮なインディオ」に援軍を要請するため、カド族のもとを訪ねた。しかしブリー

は、スペインおよび米国と中立な立場を守り、反乱には加わらないよう、カド族長に懇願していたため、カド族長はテハス王党軍の要請を断った。さらにカド族長は、コマンチェ族をはじめとする他の部族を、反乱軍には加わらないように説得した<sup>24)</sup>。そのためオソバヨ率いるインディオは、グティエレスの反乱には加わらなかったようである。結局遠征隊は、予想したほど多くのインディオからの助けを借りることができなかった<sup>25)</sup>。

#### IV 遠征隊と王党軍の対立

反乱を支援しようとする米国人は、次々とナキトツシュに集まり、そこからニュートラル・グラウンドに向かった<sup>26)</sup>。モルフィは、この状況に危機を感じてクレイボーン知事に何度も抗議するが、効果は無かった<sup>27)</sup>。クレイボーン知事は、米国人がグティエレス率いる反乱に協力することは違法だとする声明を出すも、ナキトツシュに集まってくる米国人を取り締まることはなかったのである (Castañeda 1976, vol. VI : 80)。そのため、彼らは次々とテハス入りした遠征隊に加わっていった。遠征隊侵略の危機を目前に、サルセード総督はテハス王党軍に対して、フェルナンド7世への忠誠を呼び掛けている。「私たちの真の幸福は、カトリックを信奉する現在の政府にある。この名誉ある土地には、私たちの兄弟であるヨーロッパ人の流した血が埋まっている。あなたたちの自由と幸福は、独立することではない。独立が、自由と幸せを剥奪するのだ<sup>28)</sup>」。

サルセード総督の訴えも空しく、グティエレス・マギー遠征隊がナコグドーチェスに入ると、テハーノは何の抵抗もせずに降服してしまった。ナコグドーチェスの王党軍を率いていたベルナルディーノ・モンテロー (Bernardino Montero) は、こう伝えている。「兵士たちは敵に誘惑されていて、私の命令を聞かなかった。彼らに太刀打ちできず、命からがらトリニダーに逃れてきた<sup>29)</sup>」。この報告を受けてサルセード総督は、「無知で騙されやすい住民は、反乱軍の誘惑に負けてしまう。アングロ系米国人は、悪さをするのではなく、独立を助けるためだといってテハスに入っ

てきた。(中略) そういう口実を使って、彼らは、少しずつ私たちの地方を略奪していくつもりなのだ<sup>30)</sup>」と述べている。これが24年後に現実のものとなることを、果たしてどれだけのテハーノが予期していたのだろうか。

モンテロ率いる王党軍がトリニダーに逃れてきたとき、そこにいた王党軍は合計38人であった。ここに、1000人もの遠征隊が押し寄せてきたのだから、王党軍はひとたまりもなかった。ナコグドーチェスを制圧したグティエレスは、他の村の住民に対し、以下のように呼びかけている。「親愛なるメキシコ王国 (Reyno Mexicano) の住民たちよ。(中略) あなたたちを助けるために、陸や海を越えて強力な援助がこちらに向かってきている。もう、外国人に支配されるようなおぞましい日々には戻らないであろう<sup>31)</sup>」。このときすでに、「野蛮なインディオ」や脱走兵は、米国人義勇兵を味方につけた大規模な反乱軍が侵略してくる、という知らせをテハス全体に広めていた<sup>32)</sup>。この知らせを受け取ったテハーノは、武力にも資金にも恵まれないテハス王党軍が勝つとは思えなかったであろう。

遠征隊がトリニダーに入ると、ここでも彼らは無抵抗のまま受け入れられた。その後、彼らはラ・バイアに進撃するが、そこではサルセード総督率いる王党軍が待ち伏せしていたため、遠征隊は包囲攻撃を受けた。この包囲攻撃は、1812年11月から1813年2月まで続く長期戦となり、この間、マギー大佐は病死した<sup>33)</sup>。王党軍と反乱軍は接戦を繰り返すも、副王や近隣の地方から十分な援軍を調達することができなかったサルセード軍が最終的に敗退し、彼らはサン・フェルナンド・デ・ベハルに逃れた<sup>34)</sup>。そして1813年4月2日、遠征隊はサン・フェルナンド・デ・ベハルを制した。その数日後、サルセードをはじめとする王党軍リーダーは殺害され、4月6日、グティエレスはメキシコの独立を宣言した。「正義、理性、自由の部隊が勝利した。テハスの都にメキシコ独立の旗が掲げられた。全ての人が投票権と発言権を持つ日が来たのである<sup>35)</sup>」。この独立宣言は、モレーロス (José María Morelos y Pavón) が起草した独立宣言「国民の自

覚」(“Sentimientos de la Nación” 1813年9月14日)よりも早く、ヌエバ・エスパーニャ初の宣言であった。

シェラーをはじめ、遠征隊に加わった米国人義勇兵の多くは、グティエレスが独断でサルセードをはじめとする役人を殺害したことや、テハスの独立を宣言したことに対して不満であった。そのためシェラーは、トレドを反乱軍の新たなリーダーに推薦すると、トレドはサン・フェルナンド・デ・ベハルの遠征隊に加わり、グティエレスを更迭した<sup>36)</sup>。その後トレドは、軍隊を再編成し、内陸部に進撃しようとしたが、ホアキン・デ・アレドンド(Joaquín de Arredondo)率いる王党軍がサン・フェルナンド・デ・ベハルを取り戻すべく北上してきたため、両軍は対立した。結局、1813年8月18日に起きた「メディーナの戦い」(Batalla de Medina)で遠征隊は負け、1821年まで、テハスはアレドンドの支配下に置かれることとなった。

グティエレスの反乱が原因で、テハスは多くの犠牲者と損害を被った。加えて、「野蛮なインディオ」からの襲撃がさらに増加したこともあり、1814年から1821年にかけて、テハスの治安および財政は悪化の一途をたどった。近隣の地方に移住する住民や脱走兵は後を絶たず、テハスの状況はますます悪化してしまったのである<sup>37)</sup>。この間、ルイジアナに亡命していたグティエレスは、何度かテハス遠征を試みるが、全て失敗に終わってしまう。米国では米英戦争や第一次セミノール戦争が起きていたため、十分な支援を得て遠征隊を結成することは困難だったようである。結局テハスでは、1813年のグティエレスの反乱以降、大規模な反乱が起きることはなく、1821年、メキシコの領土としてスペインから独立した。ヌエバ・エスパーニャの反乱軍にとっても、米国人義勇兵にとっても、独立運動期テハスは、それぞれの目的を遂行するための重要な活動拠点となりうる可能性があった。しかし辺境地であるがゆえ、それぞれの活動を進めるためにも多大なる労力がかかり、活動の中心拠点となることは無かった。

## むすび

グティエレスとテハーノが中心となって結成したテハス地方暫定議会が、米国人義勇兵の助けのもと起草した「1813年4月17日テハス憲法」では、「テハス地方 (Province of Texas) はテハス州 (State of Texas) と改め、メキシコ共和国 (Republic of Mexico) の不可侵の領土とする」と述べられている (Garrett 1937 : 305)<sup>38)</sup>。彼は、東内陸諸地方の独立を目指していたのだから、サン・フェルナンド・デ・ベハルを制した後、そこで独立を宣言せずに、すぐにリオ・グランデまで進軍することも可能だったはずである。実際、イダルゴと話し合ったとき、グティエレスはリオ・グランデまで進撃することで合意していたのである (Gutiérrez de Lara 1921 : 11)。しかしそうせずにテハスで独立宣言をしたのは、反乱軍の半分ほどを占める米国義勇兵を率いてリオ・グランデまで到達することに、不安を感じていたからであろう<sup>39)</sup>。そのため彼は、サン・フェルナンド・デ・ベハルを制圧した後、そこでひとまず、「テハスがメキシコに帰属する」、つまり米国には帰属しない、という独立宣言をしたと思われる (Gutiérrez de Lara 1921 : 10)。

この頃、アカプルコで反乱軍を率いていたモレーロスは、米国からの援助によって独立が達成されるのであれば、テハスを米国に譲ってもいいと考えていた (Rodríguez O. and Vincent 1997 : 20)。彼にとって北部辺境地テハスは、ヌエバ・エスパーニャの一部でなければならぬと思うほど重要な地域ではなかったと思われる。一方、グティエレスにとってテハスは、ヌエバ・エスパーニャの一部を構成する領土であった。

グティエレスは、反乱軍リーダーの中でも、米国に赴き、外国のヒトや文化、思想に触れるという稀な体験をもった人物である。その彼がワシントンから戻ると、自国にも他国にもなりうる可能性を秘めた境界地域において、米国人義勇兵の助けを借りつつ独立運動を率いた。異文化との邂逅という一連のプロセスを通じて、グティエレスのなかには、「メキシコ」という国のイメージが培われると同時に、メキシコ人としての自己意識が



芽生えていった。そしてこれと同時に、「我々の領域（テハス）」と「彼らの領域（米国）」に対する意識も先鋭化していった結果、グティエレスはテハスにおいて、ヌエバ・エスパーニャ史上初のメキシコ独立を宣言したといえよう。これは、境界地域で反乱軍を率いる上で、米国を意識せざるをえなかったがゆえのことである。グティエレスは、米国政府の傀儡などではなく、真にメキシコの独立を目指した反乱軍リーダーであった。

\*本稿の執筆にあたっては、東京大学「グローバル・スタディーズ・プログラム（組織的若手研究者等海外派遣）」、および「日本アメリカ史学会研究支援グラント」からの支援をいただいた。また、多くの方々から有益なコメントをいただくことができた。この場をお借りして、深甚たる謝意を申し上げたい。

#### 註

- 1) ここでは、米国領テキサスと区分するために、「テハス」というスペイン語の読み方を使用する。
- 2) Simón de Herrera a Nemesio Salcedo, 4 de enero de 1812, NA.
- 3) 代表的なものは、Henderson 1951 : 144.
- 4) 当時オニスはモンローに対し、米国政府がテハスでの反乱を支援している、と抗議しているが、モンローは、事実無根としてその抗議を退けた (Manning 1925 vol. I : 31-35)。
- 5) この時期モンローは、キューバで革命を起こす予定でいたトレドを支援している。Toledo a James Monroe, 4 de enero de 1812, Filibustering Expedition.
- 6) Diego Morphy a Claiborne, 19 de octubre de 1812, AGN-ND, vol. 3.
- 7) Nemesio Salcedo a Manuel de Salcedo, 3 de febrero de 1812, BA ; Juan Ruiz de Apodaca, 19 de enero de 1818, AGN-IV, Caja 2425, Exp. 12 ; Bernardino Montero a Manuel de Salcedo, 6 de abril de 1812, OG-Salcedo.
- 8) 19世紀初期の背景については、二瓶 2010 : 38-39を加筆修正した。
- 9) Manuel de Salcedo a Bernardo Bonavia, 23 de abril de 1810, AGN-PI, 201.
- 10) 東内陸諸地方とは当時、ヌエボ・レオン、ヌエボ・サンタンデール、コアウイラ、テハスの4地域を軍事・政治的に総統轄した区域。その都は、1812年までチワワにあったが、1812年以降はモンテレイに移った。ここに駐在す

る総司令官がこの区域全体の軍事・政治を司った。もともとは、1765～1771年、José de Gálvez がヌエバ・エスパーニャを視察したさいに、首都メキシコ市から遠く離れた北部の統治の効率化を図るために提唱した Provincias Internas に端を発する (Alessio Robles 1978 : 591)。

- 11) “Expediente,” 5 de marzo de 1812 a 6 de abril de 1812, BA.
- 12) トレドの父 Luis de Toledo y Liche は、セビーヤ出身のスペイン人で、ハバナの海軍将校であった。トレドは、スペインの Escuela Naval de Cádiz で教育を受け、スペインとイギリスで兵役を務めた。Timothy Palmer, “Toledo y Dubios, José Álvarez de,” *Handbook of Texas Online* (<http://www.tshaonline.org/handbook/online/articles/fto10/>アクセス2011/11/5)。
- 13) Diego Morphy a Manuel de Salcedo, 27 de febrero de 1812, NA.
- 14) Manuel de Salcedo a Comandante de Trinidad, 24 de febrero de 1812 ; Manuel de Salcedo a Comandante de Nacogdoches, 5 de marzo de 1812, BA.
- 15) これにより、サン・マルコスのような小さな村は、この時期壊滅に追い込まれた (Almaráz 1971 : 157)。インディオス・バルパロスの襲撃については、Manuel de Salcedo a Viceroy, 10 de marzo de 1812 ; Felipe de la Garza a Manuel de Salcedo, 21 de marzo de 1812 ; José Ramón Díaz de Bustamante a Manuel de Salcedo, 30 de abril de 1812, BA.
- 16) Manuel de Salcedo a Nemesio Salcedo, 27 de diciembre de 1810 ; Bernardo Montero a Manuel de Salcedo, 12 de agosto de 1812, BA.
- 17) 独立運動期、多くの連邦政府特別代理人が、シェラーと同じように大統領と国務長官に雇われ、スペイン領アメリカに派遣された。史料に基づく、彼らの任務は、「諸外国との条約の交渉と締結、諸外国の政治・社会状況に関する情報収集と報告、戦争および紛争の調停、米国領事館の調査をすること」であった。“History,” DSADS.
- 18) William Shaler to James Monroe, March 23, 1812 ; May 16, 1813 ; July 12, 1812, DSADS.
- 19) José Bernardo Gutiérrez al Coronel Shaler, 18 de mayo de 1813, DSADS.
- 20) Toledo a Coronel Shaler, 10 de julio de 1813 ; William Shaler to James Monroe, May 5, 1812, DSADS.
- 21) 遠征隊に加わった米国人義勇兵は、Samuel Kemper, Henry Perry, Rubin Ross など。詳しくは“Relación de los oficiales extrangeros al servicio de la República Mexicana q. se han distinguido en las diferentes en la Provincia de Texas,” AGI-Toledo.
- 22) William Shaler to James Monroe, June 12, 1812, DSADS. 一方、副王軍の規

- 横は最多のときで1200人程度。Gutiérrez de Lara, “Proclama,” 22 de abril de 1813, OG-Arredondo.
- 23) “Stipulations to be Entered into by a Certain Number of Volunteers,” Miscellaneous Letters.
  - 24) William Shaler to James Monroe, April 3, 1813, DSADS.
  - 25) 最終的に遠征隊に加わったのは、Tonkawas、Taobayases、Tawakanas、Lipanesであった (Hatcher 1903 : 226)。
  - 26) Nemesio Salcedo a Manuel de Salcedo, 11 de julio de 1812, BA.
  - 27) “Don Diego Morphy en contestación al mismo en fecha 21 octubre idem,” AGN-ND, vol. 3.
  - 28) Manuel de Salcedo, “A las tropas vet.nas y de milic.s que guarnece en esta provincia,” 7 de julio de 1812, BA.
  - 29) Bernardino Montero a Manuel de Salcedo, 12 de agosto de 1812, NA.
  - 30) Manuel de Salcedo al Virrey de Nueva España, 17 de agosto de 1812, BA.
  - 31) José Bernardo Gutiérrez, 1 de septiembre de 1812, BA.
  - 32) Jose María Peña al Comandante de Armas y Villas de Mier y Camargo, 15 de julio de 1812 : “Criminal de Ynfidencia,” 17 de septiembre de 1812, BA.
  - 33) 当初はグティエレスとマギーが遠征隊の大佐を務めていたが、マギーの死後、事実上グティエレス1人が遠征隊を統率した。
  - 34) Felix Calleja a Manuel de Salcedo, 31 de marzo de 1813, NA.
  - 35) “Proclama,” 22 de abril de 1813, OG-Arredondo.
  - 36) William Shaler to James Monroe, May 7, 1813, DSADS.
  - 37) 例えば Perez a José Joaquín Muños de Terán, diciembre de 1816 ; “Lista de los desertores,” 25 de julio de 1817, BA.
  - 38) 独立運動初期、「メキシコ」というと、副王のいるメキシコ市を指すものであり、ヌエバ・エスパーニャ全域を示す呼称は América であった (モレーロスの「国民の自覚」でも、「アメリカ」という名称がつかわれている)。これを América Mexicana や República Mexicana という名称で反乱軍リーダーたちが呼び始めたのは、1813年からであり、その先陣を切ったのはホセ・アルバレス・デ・トレドだとされる (Ávila Rueda 2011 : 40)。しかし、トレドに先だって、グティエレスが Reyno Mexicano という呼称を使っている。さらに、彼がワシントンに向いたときの紀行文を検討すると、「メキシコ」という呼称を初めて使ったのは、グティエレスではなく旅先で知り合った米国人であったことがわかる (彼は、グティエレスに「メキシコから来た人と初めて会った」と言った。West 1928 vol. 1 : 67)。ヌエバ・エ

スパーニャ全域を指す独立国家の名称として「メキシコ」を使用するようになった起源は、ここにあるのかもしれない。

- 39) グティエレスは米国人義勇兵のことを「野心をもった」人びととしており、彼らを信頼していなかったようである。また、テハス独立を宣言して以降、遠征隊の中では、ノボイスパーノの義勇兵と米国人義勇兵の間で仲間割れが起き、ノボイスパーノたちが米国人を全員暗殺する計画が持ち上がったという (Gutiérrez de Lara 1921 : 15-17)。

## 参考文献

### 1 未刊史料

Archivo General de la Nación (AGN), México D.F.

- Instituciones Coloniales, Indiferente Virreinal (AGN-IV).
- Historia : Notas Diplomáticas (AGN-ND).
- Provincias Internas (AGN-PI).

Briscoe Center for American History, University of Texas, Austin.

- Archivo General de México, AGN, Historia : Operaciones de Guerra, José Joaquín de Arredondo (OG-Arredondo).
- Archivo General de México, AGN, Historia : Operaciones de Guerra, Manuel de Salcedo (OG-Salcedo).
- Bexar Archives (BA).
- Nacogdoches Archives (NA).
- Archivo General de Indias, Indiferente General : José Álvarez de Toledo 1811-1815 (AGI-Toledo).

National Archive, Washington D.C.

- Correspondence Relating to the Filibustering Expedition Against the Spanish Government of Mexico, 1811-1816, microfilm T 0286 (Filibustering Expedition).
- Dispatches from Special Agents of the Department of State, 1796-1906, vols. 1-2, microfilm M 37, roll 1 (DSADS).
- Miscellaneous Letters of the Department of State, 1789-1906 : July 1-Dec. 31, 1812, microfilm M 179 roll 26 (Miscellaneous Letters).

### 2 既刊史料

Benson, Nettie Lee (trans. and ed.). 1968. "A Governor's Report on Texas in 1809," *Southwestern Historical Quarterly*(SHQ), 71 (4), April, pp. 603-614.

- Garrett, Julia Kathryn (trans., and ed.). 1937. "The First Constitution of Texas, April 17, 1813," *SHQ*, 40(4), April, pp. 290-308.
- . 1945. "Dr. John Sibley and the Louisiana-Texas Frontier, 1803-1814 (Continued)," *SHQ*, 48(4), April, pp. 547-549.
- Gutiérrez de Lara, José Bernardo. 1921. "Account of Progress of Revolution from Beginning," in Charles Adams Gulick Jr., and Katherine Elliott (eds.), *The Papers of Mirabeau Bounaparte Lamar*, vol. 1, (Austin: A.C. Baldwin & Sons Printers).
- Hamilton, Stanislaus Murray. 1969 (1898-1903). *The Writings of James Monroe, Including a Collection of His Public and Private Papers and Correspondence, Now for the First Time Printed*, 7 vols., (New York: AMS Press).
- Hatcher, Mattie Austin (trans., and ed.). 1901. "Joaquín de Arredondo's Report of the Battle of Medina," *Quarterly of the Texas State Historical Association*, 4(3), January, pp. 218-229.
- Hernández y Dávalos, Juan E. 1877-1882. *Colección de documentos para la historia de la guerra de independencia de México de 1808 a 1821*, 6 vols., (México: J.M. Sandoval).
- Manning, William R. 1925. *Diplomatic Correspondence of the United States concerning the Independence of the Latin-American Nations*, 3 vols., (New York: Oxford University Press).
- Sibley, John. 1922. *A Report from Natchitoches in 1807* (New York: Heye Foundation).
- West, Elizabeth Howard (trans., and ed.). 1928-1929. "Diary of José Bernardo Gutiérrez de Lara, 1811-1812," 2 vols., *American Historical Review(AHR)*, 34(1), October, pp. 55-77; 34(2), January, pp. 281-294.

### 3 研究書・論文

- Alessio Robles, Vito. 1978 (1938). *Coahuila y Texas en la época colonial*, Segunda edición (México: Porrúa).
- Almaráz, Félix D. 1971. *Tragic Cavalier: Governor Manuel Salcedo of Texas, 1808-1813* (Austin: University of Texas Press).
- Anna, Timothy E. 1978. *The Fall of the Royal Government in Mexico City* (Lincoln: University of Nebraska Press).
- . 1987. "The Independence of Mexico and Central America," in Leslie Bethell (ed.). *The Independence of Latin America* (Cambridge: Cambridge

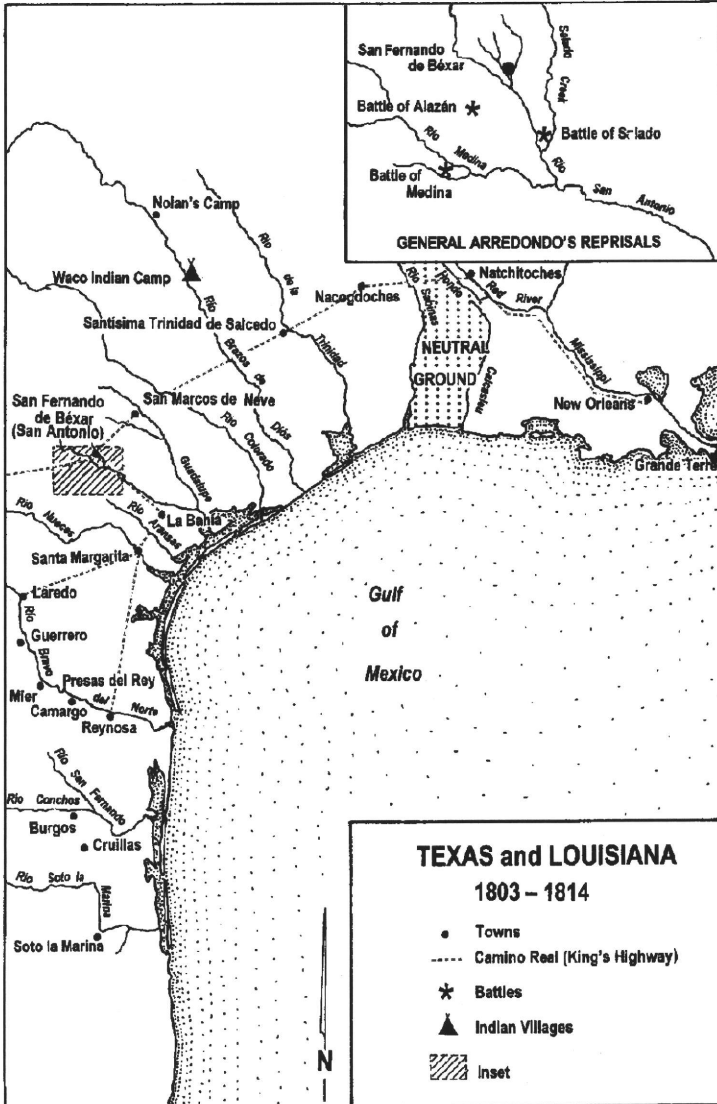
- University Press), pp. 49–92.
- Ávila Rueda, Alfredo. 2011. “¿Por qué se llama México?” *Relatos e Historias en México*, 37, Septiembre, pp. 36–44.
- Benson, Nettie Lee. 1960. “Texas’ Failure to Send a Deputy to the Spanish Cortes, 1810–1812,” *SHQ*, 64(1), July, pp. 14–35.
- Brading, D.A. 1970. *Hacienda and Ranchos in the Mexican Bajío : León, 1680–1860* (Cambridge : Cambridge University Press).
- Castañeda, Carlos E. 1976 (1936–1958). *Our Catholic Heritage in Texas, 1519–1936*, 7 vols. (New York : Arno Press).
- Castillo Crimm, Ana Carolina. 2003. *De León : A Tejano Family History* (Austin : University of Texas Press).
- Chipman, Donald E., and Harriett Denise Joseph. 1999. *Notable Men and Women of Spanish Texas* (Austin : University of Texas Press).
- Cruz, Gilbert R. 1988. *Let There Be Towns : Spanish Municipal Origins in the American Southwest, 1610–1810* (College Station : Texas A&M University Press).
- de la Garza, Lorenzo. 1939. *Dos hermanos heroes* (México : Editorial Cultral).
- de la Teja, Jesús F. 1995. *San Antonio de Béxar : A community on New Spain’s Northern Frontier* (Albuquerque : University of New Mexico Press).
- Faulk, Odie B. 1964. *The Last Years of Spanish Texas, 1778–1821* (The Hague : Mouton & Co.).
- Garrett, Julia Kathryn. 1939. *Green Flag over Texas : A Story of the Last Years of Spain in Texas* (New York : Cordova Press).
- Guedea, Virginia. 2000. “The Process of Mexican Independence,” *AHR*, 105(1), February, pp. 116–130.
- Haggard, J. Villasana. 1945. “The Neutral Ground between Louisiana and Texas, 1806–1821,” *Louisiana Historical Quarterly*, 28, October, pp. 1001–1128.
- Hämäläinen, Pekka. 2008. *The Comanche Empire* (New Haven : Yale University Press).
- Hamnett, Brian R. 1986. *Roots of Insurgency : Mexican Regions, 1750–1824* (Cambridge : Cambridge University Press).
- . 1997. “Process and Pattern : A Re-examination of the Ibero-American Independence Movements, 1808–1826,” *Journal of Latin American Studies*, 29 (2), May, pp. 279–328.
- Hatcher, Mattie Austin. 1976 (1927). *The Opening of Texas to Foreign Settle-*

- ment, 1801–1821* (Philadelphia: Porcupine Press).
- Henderson, Harry McCorry. 1951. "The Magee-Gutierrez Expedition," *SHQ*, 55 (1), July, pp. 43–61.
- Jarratt, Rie. 1949. *Gutiérrez de Lara: The Story of Creole Hero* (Austin: Creole Texana).
- Ladd, Doris. 1976. *The Mexican Nobility at Independence* (Austin: University of Texas Press).
- Martinez, Covian. 1967. *Don José Bernardo Maximiliano Gutiérrez de Lara* (Ciudad Victoria: Ediciones Siglo XX).
- Milligan, James Clark. 2010. *José Bernardo Gutiérrez de Lara: Mexicano frontero 1811–1841* (Ciudad Victoria: Gobierno del Estado de Tamaulipas).
- Moorhead, Max L. 1975. *The Presidio: Bastion of the Spanish Borderlands* (Norman: University of Oklahoma Press).
- Narrett, David E. 2002. "José Bernardo Gutiérrez de Lara: Caudillo of the Mexican Republic in Texas," *SHQ*, 106(2), October, pp. 195–228.
- Owsley Jr., Frank Lawrence and Gene A. Smith. 1997. *Filibusters and Expansionists: Jeffersonian Manifest Destiny, 1800–1821* (Tuscaloosa and London: University of Alabama Press).
- Palmer, Timothy. "Toledo y Dubios, José Álvarez de," *Handbook of Texas Online* ([http://www.tshaonline.org/handbook/online/articles/fto\\_10/アクセス2011/11/5](http://www.tshaonline.org/handbook/online/articles/fto_10/アクセス2011/11/5)).
- Poyo, Gerald E. (ed.). 1996. *Tejano Journey, 1770–1850* (Austin: University of Texas Press).
- Reséndez, Andres. 2004. *Changing National Identities at the Frontier: Texas and New Mexico, 1800–1850* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Rodriguez O., Jaime E. 1975. *Emergence of Spanish America: Vicente Rocafuerte and Spanish Americanism, 1808–1832* (Berkeley: University of California Press).
- . 1998. *The Independence of Spanish America* (Cambridge: Cambridge University Press).
- . 2000. "The Emancipation of America," *AHR*, 105(1), February, pp. 131–152.
- . 2008 (1997). "De súbditos de la corona a ciudadanos republicanos," en Josefina Zoraida Vázquez (ed.), *Interpretaciones sobre la Independencia de México* (México: Grupo Editorial Patria), pp. 33–69.

- Rodríguez O., Jaime E., and Kathryn Vincent, 1997. *Myths, Misdeeds, and Misunderstandings: The Roots of Conflict in U.S.-Mexican Relations* (Wilmington: Scholarly Resources).
- Smith, F. Todd. 1991. "The Kadohadacho Indians and the Texas-Louisiana Frontier, 1803-1815," *SHQ*, 95(2), October, pp. 177-204.
- Stagg, J.C.A. 2002. "The Madison Administration and Mexico: Reinterpreting the Gutiérrez-Magee Raid of 1812-1813," *William and Mary Quarterly* 59(2), April, pp. 449-480.
- Van Young, Eric. 2001. *The Other Rebellion: Popular Violence, Ideology, and the Mexican Struggle for Independence, 1810-1821* (Stanford: Stanford University Press).
- Vázquez, Josefina Zoraida (coord.). 2008 (1997). *Interpretaciones sobre la Independencia de México* (México: Grupo Editorial Patria).
- Vigness, David. 1965. *The Revolutionary Decades: the Saga of Texas, 1810-1836* (Austin: Steck-Vaughn).
- Villoro, Luis. 1967. *El proceso ideológico de la revolución de independencia, Segunda edición* (México: Universidad Nacional Autónoma de México).
- Warren, Harris Gaylord. 1940. "José Álvarez de Toledo's Initiation as a Filibuster, 1811-1813," *Hispanic American Historical Review*, 20(1), February, pp. 55-82.
- . 1943. *The Sword Was Their Passport: A History of American Filibustering in the Mexican Revolution* (Baton Rouge: Louisiana State University Press).
- Whitaker, Arthur P. 1964. *The United States and the Independence of Latin America, 1800-1830* (New York: Norton).
- Zorrilla, Luis G. 1965-1966. *Historia de las relaciones entre México y los Estados Unidos de América, 1800-1958*, 2 vols., (México: Porrúa).
- 二瓶マリ子. 2010. 「メキシコ独立運動再考—カサスの反乱を事例に一」(『イベロアメリカ研究』18巻第1号、8月)、37-49ページ。
- 古矢旬. 2002. 『アメリカニズム—「普遍国家」のナショナリズム—』東京大学出版会。



独立運動期テハス



出典：Castillo Crimm 2003：43.